

# 総合学としての死生学の可能性

渡辺 和子

## はじめに

生まれてきた者はいつか死を迎えるということほど確実なことはないが、近年になって「死生学」の必要が生じてきたのはなぜであろうか。そして「死生学」はどのような性格をもつのか、またもつべきなのか。その答えは一樣ではないはずであるが、そこにはどのような多様性があるのか、また目指すべき方向性があるのかなどについて考えてみたい。

東洋英和女学院大学が開学してからちょうど20年になろうとしている。現在の大学は人間科学部と国際社会学部の二学部からなるが、1989年4月の開学時には人間科学部の一学部だけがあり、そのなかに人間科学科と社会科学科の二学科がおかれていた。当初はコンパクトであったものの、現在の大学の元型がすでにあったといえる。そして一貫して人文科学と社会科学の「学際的」な研究と、専門に根ざした教養教育を実践してきた。

このような特色を活かして2003年には大学に、現代史研究所とならんで死生学研究所が開設され、2004年度に本格的な活動を始めた。その後5年が経過し、『死生学年報』の出版も本巻で5巻目となる。これまでも各巻末には当該年度の活動を報告してきたが、本論では本研究所の内外で展開されてきた死生学を振り返りながら、死生学のあり方の可能性をさぐってみたい。しかし網羅的に検討することは困難であるため、今後の指針につながるようないくつかの点を拾い出してみることにする。

## 1. 人間を全体的にとらえること

「人間を全体的にとらえること」について検討する者は、自分自身の「全体的人間像」を投影してしまうことに注意が必要であるが、いずれにしても、近代以降の学問は人間について多くの学知を蓄積してきたにもかかわら

ず、生と死を含む人間の全体をとらえることができず、またその事実を現代になって認識し始めたということになる。そして1970年前後から新たに「死生学」（英語ではThanatology, Death Studiesなど）<sup>1)</sup>の必要性が広く唱えられるようになった。確かに20世紀は「戦争の世紀」といわれ、人類は歴史上初めて大量死、大量虐殺を体験した。また各国の事情は違うが、疫病やインフルエンザの流行、不治の病、高齢化などの問題に直面することになった。このような要因も人々の死への関心を高めたのであろう。<sup>2)</sup>しかしながら、それ以上に「死生学」への直接的な動因となったのは、医療技術の進歩により病院のなかで治療できる病気が増えていったことと裏腹に、その時々医療技術では治療できない病気によっても病院で死ぬ人が増えていったという事態である。人間の病気治療だけでなく、死までも医療の支配下に置かれるようになったというこの人類史上新しい事態に対して、何らかの打開策を求める声があげられるようになった。<sup>3)</sup>そして人間はいつか必ず死ぬものであるという厳然たる事実を改めてみつめなおし、医療による過度の延命をやめて、死にゆく人を看取る人をも含めて支える医療が求められるようになった。そのためには医療の現場においても、人間を全体としてとらえることが必要になる。それは目前の患者の全体ということだけでなく、その背景にある人間の文化、宗教、教育、社会、歴史その他のあらゆる事柄が入り込む全体ということになる。人間にとっての根源的な生と死を見つめ、支えるという仕事は近代医療の課題ではなかった。進歩した医療が担いきれない生死の問題を自覚し、それを医療現場の内外にむかって提起し、「死生学」の成立への動きが起こったのである。

死は日常生活から隔離されて病院のなかに封じられたという側面をもつようになっていた状況から、<sup>4)</sup>死をめぐる問題に対する一般の人々の関心と呼びおこした運動には大別すると二つの方向性がある。一つは欧米で発祥した活動や理念が日本に導入され、受容されたものであり、もう一つは、欧米よりもむしろ日本で特有の展開をみせたものである。前者には、死生学に方向性を与えた画期的な活動と著作があり、後者にはたとえば日本における臓器移植をめぐる広範囲の議論がある。

## 2. 全人的ケアの開拓者たち

全人的ケアを目指すものが思い起こすべき「開拓者」として、筆者はマ

ザー・テレサ、シシリー・ソンドース、そしてエリザベス・キューブラー＝ロスの三人を挙げたい。偶然三人とも女性であるが、とくに死にゆく人々のケアをめぐる実際の活動を通して多くの現代人に強く訴える力をもった。<sup>5)</sup>そして三人とも宗教的、あるいは霊的動機と信念をもってそれぞれの活動を行ったことが共通している。

## 2.1. マザー・テレサ

マザー・テレサ（本名アグネス・ゴンジャ・ボヤジュ、1910－1997 年）は 1910 年に旧ユーゴスラビア（いまのマケドニア）のスコピエに生まれたアルバニア人であるが、1929 年にインドで修道女となった。彼女は「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ 25：40、新共同訳）という聖書の箇所をかねてより自分自身へ向けられたものと受け取っていた。そして 1946 年、ダージリンヘ向かう車中で「私は渴く」というイエスの声を聞いたこととその聖句が結びついて召命を確信し、1948 年には修道院を出てカルカットで貧民救済の活動を始めた。<sup>6)</sup> 1950 年にはカトリック修道会「神の愛の宣教者会」を設立して「誰からも世話されない人のために働く」ことをめざして貧者、病者を助ける活動を続け、1952 年には最初の「死にゆく人の家」というホスピスのような施設を開設した。さらに 1955 年には最初の「孤児の家」を、1959 年にはハンセン病患者のための診療所を開いた。マザー・テレサは相手の出身や宗教の区別なく世話し、また看取りにおいてはなるべく死にゆく人の宗教を尊重したとされる。やがてこの修道会の活動は全世界に広がり、マザー・テレサは 1979 年にノーベル平和賞を受賞した。彼女の死後も「神の愛の宣教者会」の活動は世界で続けられている。<sup>7)</sup>

マザー・テレサが世話した人々は近代医療の外側におかれた、いわば「病院の中でさえ死ねない」境遇の人々であったかもしれない。しかし誰からも世話されない人、愛されない人のために働くという原則から病者のケアを考えるという彼女の信念は、医療の場だけでなく、あらゆる場において今後も深い意味を持ちうる。また死にゆく人の信仰を尊重した看取りをする彼女の姿勢、そしてケアをする人が死にゆく人から祝福を受けるという姿勢は、現代の看取りをめぐる議論にも示唆を与えることであろう。<sup>8)</sup>

## 2.2. シシリー・ソンドース

イギリスのシシリー・ソンドース（1918－2005 年）は 1945 年に看護師、ソーシャルワーカーとなり、そして 1957 年には医師となって 1967 年に近代ホスピス（セント・クリストファー・ホスピス）を創始した。<sup>9)</sup> また日本のホスピス誕生にも大きな影響を与えた。<sup>10)</sup>

彼女の評伝によれば、ソンドース家は特に宗教的ではなかったというが、<sup>11)</sup> ある時から教会に通い始め、福音主義派のグループに加わる。そしてある種の回心をしたことを評伝は次のように伝えている。

ある日礼拝が終わると、シシリーは二階に行き祈り始めた。「私はこう祈ったのです。『神様、私はこれまで感情に流され続けていました。また神様を信じその下で一生懸命努力します、と誓った時も、実のところはどれほど心から本当にそう思っていたかわかったものではありませんでした。でもどうか、こうした今までのことを赦してもらえますか』、と。すると主は、『何かをなすのは私であってお前ではない』と語ってくれたように私の心には聞こえたのです。この瞬間、神が私を守ってくれ、全ては大丈夫なのだということを心の底から実感したのです。今までずっと背を向けてきた世界が突如として眼前に開けた、そんな感じでした」とシシリーは述懐している。<sup>12)</sup>

ソンドースはその後しばらく福音主義派の教会で熱心な活動が続けていたが、ホスピスを開設する前に、自分の信仰を他人に押し付けないという立場に変わったという。<sup>13)</sup> ソンドースは治療に用いる精緻な科学とケアの技術の双方を重視し、それが患者や家族たちへの思いやりの心と相まって力を発揮すると述べている。<sup>14)</sup> さらに「個人が必要としているものに関心のすべてを集中することと、地域共同体全体への責任バランスとを人間はどのようにとるのか」という問題について 1980 年のスピーチの中で次のように述べている。

一種の創造に伴う緊張のなかで、人間は確固たる信念と、雅量という柔軟性をいかに共存させるのであろうか。あたかも、二本の異なる支柱を

立てて、激しくその間に火花を散らしているようなものである。我々は、あらゆる分野で常に新鮮な疑問を抱き、新しい真実を求める用意がなければならないということだ。互いに正反対に見えるものを確認し、しかもそこに誤った妥協を成立させないようにしながら、実際には、それら異なるものが共存しうることを示せば、この問題に決着をつけられるだろう。<sup>15)</sup>

ソンドースが新しい理念をもった施設を作り運営する先駆者たりえたことは、高い理想をもちながら現実に対処する配慮と能力、対立する要因の双方を生かす方策を捻出する力量とに裏打ちされていたといえる。

### 2.3. エリザベス・キューブラー＝ロス

エリザベス・キューブラー＝ロス（1926－2004年）が死にゆく人々との対話に基づいて、「死の過程の五段階」があることを示した『死ぬ瞬間』（1969）<sup>16)</sup> は大きな反響をよび、まもなく日本でも翻訳されて日本の終末期医療やホスピス運動の推進力となった。

キューブラー＝ロスの経歴と活動については自伝『人生は廻る輪のように』（1997、邦訳1998）に詳しく記されている。彼女はスイスで医学部を卒業し、1958年にアメリカ人の夫とともにアメリカに渡る。そこで1961年から「死と死にゆくこと」についての講義を開始し、精神科医となる。『死ぬ瞬間』の出版の後も精力的に仕事を続けながらも次第にその力点を移してゆき、『死後の真実』<sup>17)</sup>、そしてD. ケスラーとの共著『ライフ・レッスン』<sup>18)</sup> や『永遠の別れ―悲しみを癒す智慧の書―』<sup>19)</sup> など多数の出版によって、彼女が体験的に把握した生き方、死に方、そして死後の生を説くようになる。また子どもの死をめぐる考察<sup>20)</sup>、終末期患者のほか、癒しを必要とする人のための「シャンティー・ニラヤ」（サンスクリット語で「やすらぎのついの住み処」の意とされる）<sup>21)</sup>、エイズ患者のための施設開設と運営<sup>22)</sup> においても先駆的貢献をなした。そして彼女の死後もその業績の評価と議論が盛んに行われている。<sup>23)</sup>

キューブラー＝ロスの最後の著作となった『永遠の別れ』の最後で「死の過程の五段階」にふれて次のように述べている。

最後にあたって、読者に伝えたいことがある。それは、私の人生の目的がああ「五段階」以上のものであるということだ。わたしは結婚し、子どもにめぐまれ、孫にめぐまれ、本を書き、旅行をしてきた。愛した。喪失も体験してきた。そしてわたしは「五段階」よりはるかに遠いところにきている。読者もおなじだと思う。「五段階」を知ることだけが重要なのではない。生の喪失だけが重要なのではない。重要なのは、生きられた生である。<sup>24)</sup>

上記三人の開拓者たちからは今後も学びとるべきものが多い。「全人的ケア」とは何か、そして何が「全人的ケア」を可能にするのかという問いは今後さらに重要度を増すからである。ちなみにマザー・テレサとキューブラー＝ロス は 1970 年代の半ばに会って語り合っている。<sup>25)</sup>

### 3. 新しい問題と関心の広がり

臨床における取り組みだけにとどまらず、死に関する研究書や一般書が出版されるようになった。またいくつかのテーマについて多くの人々の関心を集めたことには、出版だけでなく、テレビ放送などのマスメディアが果たした役割も大きかった。

#### 3.1. 死と終末期をめぐる研究書

欧米では、臨床における画期的な活動とそれに関する著作ばかりでなく、死と終末期（医療）をめぐる哲学、社会学、歴史学、人類学などの観点からも重要な研究書が 1960 年代から 70 年代にかけて相次いで出版された。すでに「古典」としての位置を占め、それらの邦訳書は日本の死生学の形成に大きな影響を与えている。

一例を挙げるならば、ジャンケレヴィッチ『死』（1966、邦訳 1978）、ジェフリー・ゴラー『死と悲しみの社会学』（1965、邦訳 1986）、イヴァン・イリッチ『脱病院化社会－医療の限界－』（1976、邦訳 1979）、フィリップ・アリエス『死を前にした人間』（1977、邦訳 1990）などの著作である。<sup>26)</sup> これらについてはすでに広く論じられているため、ここでは詳述しない。これらのほかにも今日の死生学の古典と目される著作は数多くあるが、それぞれに独創的な視点と問題意識をもち、既存の学問分野を超えて新しい領域

を創出することに貢献した。

当然のことながら、異文化間には枠組みの違いがあり、欧米の理論がそのまま日本にあてはまるわけではない。あえてあてはめることによって無理や矛盾が生じている場合もある。<sup>27)</sup> 現在、上記の理論について欧米でも日本でも再検討が行われているが、<sup>28)</sup> 今後はそれぞれの文化圏における特殊性についての研究も行うべきであろう。<sup>29)</sup>

### 3.2. 臨死体験と死後生への関心

死のテーマに関する研究書よりも格段に多くの人々の関心を集めたものは、メディアが大きく取り上げた「臨死体験」(Near Death Experience)であった。多くの人がもつ「死んだらどうなるのか」、「死んだらどこへ行くのか」などの問いに対して、かつてはさまざまな宗教がそれぞれの答えを用意していた。しかしそのような答えが説得力をもちにくくなっていた 20 世紀後半に、新たに「臨死体験」という形で「死後の世界」や「死後生」が語られるようになったことは興味深い。それには現代の救命医療と蘇生術の発達という誘因もあった。

「臨死体験」ブームの火付け役となったのはレイモンド・ムーディによる『かいまみた死後の世界』<sup>30)</sup> の出版である。彼は医学論文をまとめるべく患者の話聞くうちに、「臨死体験」なるものが存在することを確認したという。<sup>31)</sup> そしてこの本の「序」は、すでに臨死体験を深く理解していたキューブラー＝ロスが寄せている。同じ医者として、同じくタブー視される領域へ踏み込むことによってムーディも批判を浴びることを予想しながら、彼に大きな賛辞を送っている。<sup>32)</sup> ムーディは、すでにこの本のなかで臨死体験の類例を『聖書』、プラトンの書物、『チベット死者の書』、そしてエマヌエル・スウェーデンボリの体験の中に探っている。<sup>33)</sup> しかしそれだけではなく、過去にも「死後の世界をかいまみた」あるいは「旅した」という体験は多くあったはずであり、伝統的な宗教の他界観、そしてさまざまな文学や美術のなかにもその体験が投影されている可能性がある。

その後ムーディは『続・かいまみた死後の世界』<sup>34)</sup> を出版し、さらに臨死体験の例について記述している。なかでも自殺未遂の場合の体験では「罰」をとまなう体験になることが報告されている。<sup>35)</sup> そのようなことも伝統的宗教の「死後の裁き」や地獄のイメージと結びついた可能性もあり、古今東西

の宗教的伝承と比較検討するという課題が生じる。

日本でもムーディの書物が翻訳され、さらに1991年にNHKが「立花隆レポート」として臨死体験に関する番組を放映したことで大きなブームがおこった。<sup>36)</sup> 研究者のなかでは特にカール・ベッカーが早くから臨死体験に着目し、<sup>37)</sup> ブームが去ったあともその重要性を強調している。<sup>38)</sup>

### 3.3. 脳死と臓器移植問題

脳死者からの臓器提供への道を拓くことにおいて、日本は欧米と比べてきわめて消極的であったが、法律が制定される前にマスメディアを含めて、脳死を死と認めるか、臓器移植は是か非かをめぐって、全国的な論議が長期間続けられた。<sup>39)</sup> これほど多くの日本人が死について考え、話し合う機会をもったことは銘記されてよい。1989年に設置された「臨時脳死及び臓器移植調査会」でも意見が一致せず、1992年に提出されたその「答申」には哲学者梅原猛らの脳死を死と認めない意見<sup>40)</sup>が、異例のことながら「少数意見」として併記された。しかし1997年に「臓器の移植に関する法律」が公布されると、マスメディアは臓器移植に批判的な意見は取り上げなくなり、国民の関心もさめた。そしてその後も日本での臓器移植は活発になっていない。

しかし一方では、臓器移植が進まない日本でこそ、脳死状態に陥ることを防ぐ低体温療法が開発され、<sup>41)</sup> また脳死ではないが、植物状態の人に対しても積極的に関わってその回復に成果をあげたという実績がある。<sup>42)</sup>

M. ロックは臓器移植が進まない日本の特殊事情に注目して、医療人類学的考察を行っている。<sup>43)</sup> ロックがいうように確かに北米とは風習や死生観の違いがある。しかしながら臓器提供は善行であるという考えは日本でもある程度根付いている。また最近では、臓器移植を子どもに望む場合に海外渡航を余儀なくされること、またそのための渡航が制限されることなどについての議論がある。しかしこの問題については、感情に訴える、また外国の死生観と比べるというだけではなく、臓器移植についての本質的な議論が必要である。たとえば人間に備わっている免疫力をどのように考えるのか、<sup>44)</sup> 臓器提供者の死をどのように受け止め、その遺族に対してどのような考えを持つかなどのほか、多種多様な問題群がある。<sup>45)</sup> 脳死と臓器移植の問題を契機として、万人に共通する死の定義は存在しないことが確認されたことは、背景にある文化、歴史、宗教、民俗などを研究する重要性を認識させたと同時に、



死を法律で定義することに対する疑問も抱かせるようになった。

臨死体験や脳死問題についての関心が高まっていた時期は過ぎている。しかし近い過去に生死をめぐる広い関心と盛んな議論があったことを再評価し、それを今日の「いのちの教育」、<sup>46)</sup> クローン問題、自殺予防、最先端医療、<sup>47)</sup> 生命倫理などの論議<sup>48)</sup> につなげてゆく視点も必要と思われる。

## 4. 日本における先駆的な活動と「死生学」

### 4.1. 終末期に関する活動

日本の「死生学」の形成過程については、すでに島藺が描き出している。<sup>49)</sup> その過程での重要な先駆的活動として次の三点をあげたい。第一点は1977年に「日本死の臨床研究会」が創設されたこと。<sup>50)</sup> 第二点は、大阪淀川キリスト教病院の精神科医柏木哲夫が、特にシシリー・ソンドースとの出会いを通してホスピス開設のために内科医としての研修も受け、1984年に日本初のホスピスを設立したこと。<sup>51)</sup> 第三点は、東京では1982年以降、カトリック司祭で哲学者のアルフォンス・デーケンが上智大学で開いた「生と死を考えるセミナー」から「生と死を考える会」が発足し、全国的な活動が展開されたこと。<sup>52)</sup>

このような活動からも伺えるように、日本においても終末期医療の現場から問題提起がなされ、欧米の理論と実践を取り入れた活動が開始され、その問題意識が広く市民レベルへ浸透していった。

### 4.2. 「死生学」の構想

日本における研究領域としての「死生学」の構想は、医療の分野を中心にするものと人文科学分野を中心にするものとの二つに大別される。双方とも医学、人文学、その他の分野の論考を集めて「学際的」であろうとするが、重点の置き方と対象とする読者が少し異なっている。

日野原重明は日本における「死生学」の嚆矢にふれて次のように述べている。

世界で Thanatology の講座が最初に（1963 年）作られたのはミネソタ大学で、R・フルトン教授だったと聞いている。彼は医師ではなく、社会学を専攻した学者であった。私は、その先生を 1985 年に日本に迎え、

「死生学」の講演をしてもらった。日本における最初の死に関するシンポジウムがこの時もたれた。私は1983年に『死をどう生きたか』（中公新書）という本を出版し、その中に私が受け持った患者がそれぞれどういう姿で死を迎えたかを紹介した。釈尊は、「生老病死」を四苦として、人間が生き、老い、死を迎える苦しみについての教えを述べたが、生老病死の苦しみを通して私たちは、死と同時に「生き方」を学ぶことができるのである。<sup>53)</sup>

さらに日野原（当時、聖路加看護大学学長）は、「学際的」な死生学を目指す先駆的出版物として、山本俊一とともに『死生学—死から生の意味を考える—』（1988）を編んだ。<sup>54)</sup> 冒頭の編者の言葉には次のようにある。

過去10年前までの日本の医学や看護の領域では死を考えることがタブーとされていた。患者には癌があっても癌とは告げず、瀕死の重症で治療が科学的に考えて不可能と思えても延命手段を施し、患者が苦む寿命を延ばすことが唯一の正しい道と医師は考えてきた。しかし、医学は単なる科学ではない。人間の生命を考える科学であり、自然科学以外の人文科学や宗教までも学際的に扱うことの必要性が、医療従事者や医学者の一部によって、やっと認められるようになった。死の実体と死にいく人へのアプローチを考えない限り、人間の生とは何かということを理解することはできないと私たちは考えている。本書は、医療に従事する医師、看護婦、学生、臨床の第一線にある医療提供者のために、ライフサイエンスの中での生と死の問題を、基礎医学者、臨床家、社会学者、宗教家などのそれぞれの領域から取り扱ってもらい、また死をめぐるの生の問題も含めて執筆していただいた。本書は、医療従事者や学生だけでなく一般の人々がめいめいの生と死を深く考えるために広く読んでいただきたいと思う。

この書では6人の執筆者によって次の9つのテーマが扱われている。1「日本人の死生観」（山本俊一）、2「社会的立場から見た人間の生と死」（佐藤裕）、3「神経症者における死の意識について」（平山正実）、4「デス・エデュケーション—死の教育—」（斉藤武）、5「生を衛る衛生学」（山本俊一）、6「ター

ミナルケアと病名告知」(河野友信)、7「バイオエシックスとターミナルケア」(河野友信)、8「悲嘆グリーフ」(斉藤武)、9「死の医学と看護」(日野原重明)。

このように執筆者と内容はやや医療の分野に偏っているが、同時に一般の人も「生と死を深く考えるために」読んでもらいたいという編者の意図にも注目したい。実際には、医療従事者も一般の人と同様に死について多角的に学ぶべきだということであろう。このような洞察に基づいて「学際的」な死生学が新たな一步を踏み出したといえるのではないだろうか。<sup>55)</sup>

以上瞥見したように、日本において終末期医療の刷新と黎明期の「死生学」が、キリスト教的背景をもつ人材によって牽引されたことは明らかである。もちろんそのなかでも、キリスト教徒ではない大多数の日本人の需要にあったものが模索されてきた。他方、仏教の陣営からも仏教的なホスピスとしての「ビハール」が提唱され、実現されている。<sup>56)</sup>

#### 4.3. 「死生学」に関する論集

その後も「学際的」な死生学の試みがなされていく。しかしそれによってもたらされる成果は簡単に見えてくるものではない。たとえば十の分野について専門家十人が執筆したとしても、横のつながりは理解できない。研究者の間でも踏み込んだ議論はおこりにくい。また一つの分野が一人の執筆者によって代表されるわけでもない。

それでも「死生学」あるいはそれに類するテーマをもつ論集がいくつか出版されたことは「死生学」の具体的な内容を示すことに役立った。そのうちやや自然科学よりのものとして有馬朗人ほか著『東京大学公開講座 55 生と死』(1992)、<sup>57)</sup> 人文科学、社会科学の分野に重点をおきながら多様な論考が編纂されているものとして竹田純郎／森秀樹編『＜死生学＞入門』(1997)<sup>58)</sup>、神奈川大学評論編集専門委員会編『死のコスモロジー』(1998)<sup>59)</sup>、細見博志編『生と死を考えるー「死生学入門」金沢大学講義集ー』(2004)<sup>60)</sup> などがある。

### 5. 総合学としての死生学へ

人間の生死の問題を視野に入れない病気治療は、はじめから限界をもつも

のであったといえる。しかし人間に関わるすべての事柄を考察の対象とし得る総合的な「死生学」はどのように構想できるのであろうか。もちろんこの問いに対しては唯一の答えがあるわけではなく、また短期間に導きだせる答えがあるわけでもない。しかしすでにさまざまな試みが提出されている。

### 5.1. アメリカの例

ベッカーによると、<sup>61)</sup> アメリカには数多くの死生学関連の教育プログラムと出版物があるが、大学の中で死生学を一つの専門領域としている大学は少ないということである。<sup>62)</sup> ここでは最近のアメリカの死生学(Thanatology)の内容を示す一例としてデイヴィッド・E. バルクの編集による『死生学ハンドブック—死、死にゆくこと、死別の研究のための基礎知識—』(2007)を取り上げる。バルクは「多分野にわたる複合的な領域を修めることが死生学だとすれば、それは人間の能力を超える仕事」なのであり、一人の人間には修められないほどに広大なものになったと述べ、<sup>63)</sup> この7部38章からなる『死生学ハンドブック』を編むことによって一つの指針と俯瞰図を示すとしている。

その構成は、第1部「死にゆくこと」、第2部「終末期の自己決定」、第3部「喪失、悲嘆、喪」、第4部「診断と治療処置」、第5部「心的外傷を起こす死」、第6部「死の準備教育」、第7部「死生学の基礎知識全体に関する二つの指標」とされているが、はじめの6部にはすべて次の6つの観点からの論考6章が置かれている。①「文化と社会」、②「宗教とスピリチュアリティ」、③「歴史と現代の視点」、④「寿命の問題」、⑤「家族とそれより大きいシステム」、⑥「倫理と法律」。このような構成によって、統一感のある総合的な「死生学」の見取り図を描く試みとなっているといえる。

### 5.2. 日本での試み

「アエラムック」(朝日新聞社)のシリーズのなかで『死生学がわかる。』(2000)が出版されたことは意義深い。なお先に引用した日野原の言はその冒頭におかれた「死生学への誘い」にある。この本にはさまざまな分野から30人以上が貢献している。また「『生』と『死』を考えるブックガイド五十冊」<sup>64)</sup>や「『生』と『死』を考える映画ビデオガイド」<sup>65)</sup>も添えられている。どちらかというとならべて「臨床」分野の貢献が多く、文学、歴史学、宗教学、

人類学などの分野はあまり扱われていない。しかし興味深いことは、このシリーズにおいて『死生学がわかる。』が「総合系」として位置づけられていることである。「総合系」のほかには「人文科学系」「芸術系」「社会科学系」「自然科学系」「家政学系」「医療福祉系」「教育系」「工学系」がある。そして「総合系」のなかには『死生学がわかる。』と並んで『情報学がわかる。』、『環境学がわかる。』などが分類されている。<sup>66)</sup>

## 6. 「人文社会系」の死生学

これまでもさまざまな「学際的」研究はなされてきた。しかし現在、死生学については、多分野が並べられるだけでなく、それぞれがより緊密な関係をもつ死生学の模索は人文科学と社会科学を基軸とする大学や大学院でなされている。

### 6.1. 「死生学の構築」

2002 年から文部科学省の研究拠点形成等補助金事業として東京大学大学院人文社会系研究科を中心に、医学部、教育学部などと協力しながら、宗教学者、島蘭進をリーダーとして「21 世紀 COE 死生学の構築」の研究活動と公開講座が 5 年間行われたことは意義深い。またここでは「死生学」の英訳が Death and Life Studies とされたことによって、それまでの Thanatology (Death Studies) を大きく超え出る内容をもつことが示されている。この COE の成果は 2006 年までに 8 冊の『死生学研究』(非売品)<sup>67)</sup>として出版され、さらに 2008 年には、その成果に基づいて『死生学』全 5 巻<sup>68)</sup>が出版された。なお、この研究活動は 2007 年以降、「グローバル COE 死生学の展開と組織化」として再スタートしている。<sup>69)</sup>『死生学』全 5 巻の編者代表者はこの出版の目的を次のように説明している。

まずは基盤を広げることに主眼を置いている。医療現場や死に直面した人々、死別の悲しみに耐える人々のケアの現場と密接に関わる「臨床死生学」の領域をつねに見すえている。人文科学・社会科学と自然科学の橋渡しが必要となる分野だとも自覚している。だが、研究プロジェクトの展開の経緯を反映して、とりあえず「人文社会系」からのアプローチが基軸となる。古今東西の死生観の比較研究や歴史的・人類学的研究、ケ

アの実践の哲学的・社会的考察、生死に関わる存在論的問題や倫理的問題の原理的考察にいたるまでの広い諸問題を扱う「基礎死生学」の諸領域に触手を伸ばすことに力を入れている。がっちりとしたまとまりをもった体系を示そうというのではない。包括的であるよりも、探索的であることを目指している。<sup>70)</sup>

この趣旨に沿って『死生学』の5巻は『死生学とは何か』<sup>71)</sup>、『死と他界が照らす生』<sup>72)</sup>、『ライフサイクルと死』<sup>73)</sup>、『死と死後をめぐるイメージと文化』<sup>74)</sup>、『医と法をめぐる生死の境界』<sup>75)</sup>と題され、合計52の論考が集められている。この出版の新しさは、「人文社会系からのアプローチ」を基軸とした本格的な「基礎死生学」の可能性と同時に「人文社会系」の新たな可能性を示している点にある。

## 6.2. 本学の死生学研究所

冒頭で述べたように、本学の死生学研究所は2004年から、すなわち上記のCOEよりも少し遅れて活動を始めた。人文科学と社会科学を主眼とし、「学際的」な研究・教育を目指してきた本学は小規模大学であっても教員の専門領域は多岐にわたる。そのために「幅広い」死生学を目指すための素地があった。本研究所が発行してきた本書を含めて5巻の『死生学年報』<sup>76)</sup>には、本学教員と外部執筆者による合計47の論考（講演録、エッセイを含む）が掲載されている。これは年報でもあるため、上記の『死生学』全5巻とは異なり、テーマ分けをして出版してきたわけではない。しかし全体的にみれば論題の多様性と具体性において多少の貢献ができていかもしれない。

日本ではThanatologyが「死学」ではなく、「死生学」として定着したからこそ、人間に関するほとんどすべての研究、いわば「人間学」や「人間科学」を死生学のなかに含めることが可能になり、そこに「日本の死生学」の新しい可能性が生じたとみることができる。そして本学では、人間科学部の諸分野（宗教学、心理学、教育学、社会学、福祉学）と国際社会学部の諸分野（地域研究、経済学など）が協力して死生学研究所の活動が行われている。<sup>77)</sup> また死生学に関しては他の分野とは異なり、「基礎」と「臨床」の区別は本質的ではないといえる。そこではどんな研究、教育、そして活動も広い意味の「臨床」に直結しうるからである。その意味で本研究所は、基礎死生学と臨床死

生学の総合をも目標とする。

他のいくつかの大学にも死生学関連の講座や研究所が設置されているため、今後はさらなる連繋や情報交換に力をいれたい。

## 7. 展 望

「総合学としての死生学」を目指すにあたって要点となることから素描してみる。死生学は発展途上にあり、輪郭が定まっているわけではない。多数の分野が有機的に関わることによって改めて新しい問題や領域が発生してくるような場の設定が要請される。したがって何よりも「継続する多様な研究」が推進されなければならない。そしてそこに参加する者には、それぞれの立ち位置からの専門性の高い貢献とともに、異分野との対話に用意があることが求められる。自己限定的ではなく、自己発見的あるいは自己発展的な研究をする構えが必要である。そして異なる分野の研究者にも一般の人にも、分かりやすい言葉で語れることが肝要となる。外国の理論を導入するだけではなく、自らの研究を国際的に発信することも求められる。折りしも、主演の本木雅弘が青木新門『納棺夫日記』（1993）<sup>78)</sup> から着想を得て制作されたという映画『おくりびと』（滝田洋二郎監督作品）が第81回アカデミー賞外国語映画賞を受賞した（2009年2月）。<sup>79)</sup> 今後いつそう日本の死生の文化に注目が集まるであろう。<sup>80)</sup>

完全な「総合」はありえないが、常により総合的であろうとすることが死生学研究者には望まれる。全体を俯瞰することのできない、発展を続ける総合学が死生学ということになる。そしてそれは、人間を全体的にとらえることが決して完成しないことと重なる。梶田昭は『医学の歴史』の冒頭で「医学は人間の『慰めと癒し』の技術であり、学問である」<sup>81)</sup> という。しかし学問分野が分化していなかった時代には、人間の慰めと癒しの技術と学問に名前がついていなかったであろう。あるいは医学、神学、人間学など、それぞれの時代と場所に応じた呼び名があるのかもしれない。学問分野が細分化されすぎた後で、またそのためにこそ必要となった死生学は、その内側で無数の異分野間の出会いと衝突、そしてパラダイム・シフト<sup>82)</sup>を生じさせることになる。そしてそれを通して自らを醸成させてゆくことが期待される。

## 注

- 1) 「死生学」成立の歴史的背景については島蘭／竹内編 2008 参照。英語の Thanatology の訳語として「死学」ではなく、「死生学」として定着したが、それは島蘭が指摘するように、日本ではすでに「死生観」の語が定着していて、死と生をあわせて考えることに慣れていたためであろう。島蘭 2008b, pp.20-27 参照。
- 2) たとえばイヴァン・イリッチ 1979 参照。
- 3) 日本とアメリカの最近の状況についてはたとえばベッカー 2000b 参照。
- 4) 死が隠されたことと「死のポルノ化」についてベッカー 2000a 参照。
- 5) この三人を選ぶことは筆者の考えによるが、(財)倉敷中央病院の緩和ケアが発信しているインターネット情報、<http://www.kchnet.or.jp/carenews11.pdf> (2009 年 3 月 1 日アクセス) では、同じ三人を「20 世紀の 3 人の偉大な女性」とし、特にソンドースについて説明している。
- 6) ゴンザレス - パラド編 1997, pp.10-11 参照。
- 7) マザー・テレサ 1982；グレイ 1991；女子パウロ会編 2003；五十嵐 2007 などを参照。マタイスによれば、「マザーの会の会憲の具体性は『宣教は理念で論ずるのではなく、現実目の前に横たわっている一人のハンセン病患者に手を差し出すことによってもたらされる』という教えであり、さらに『貧しさというのは、福祉でとらえられるような貧しさ一般ではなく、すべては個性的で血の通っている人間がそこにいる』ということを喚起するための主張でもある。貧しさを見るのではなく、その人を見なければいけないのである。」マタイス 1997, p.142。
- 8) マタイス 1997, pp.154-157; pp.181-185 参照。パンクロフトはマザー・テレサを「実践的神秘主義者」と評している。パンクロフト 1984, pp.354-370 参照。
- 9) ドゥブレイ 1989 参照。1980 年 6 月にイギリスで開催された「第 1 回ホスピス国際会議」でのソンドースのスピーチ、ソンドース 2006, pp.22-23 も参照。
- 10) 柏木 2006, pp.32-40 参照。
- 11) ドゥブレイ 1989, p.51.
- 12) ドゥブレイ 1989, pp.54-55.
- 13) ドゥブレイ 1989, pp.204-205.
- 14) ソンドース 2006, p.23.
- 15) ソンドース 2006, pp.23-24.
- 16) キューブラー＝ロス 2001a (1971).
- 17) キューブラー＝ロス 1995a.
- 18) キューブラー＝ロス／デーヴィッド 2001.
- 19) キューブラー＝ロス／デーヴィッド 2007.



- 20) たとえばキューブラー＝ロス 2007.
- 21) キューブラー＝ロス 1998, pp.291-296 ; ト部 1991 参照。
- 22) キューブラー＝ロス 1998, pp.295-296; 306-314 参照。
- 23) たとえば田口 2008。
- 24) キューブラー＝ロス／デーヴィッド 2007, p.356.
- 25) キューブラー＝ロス 1998, p.247 参照。
- 26) モラン 1973、エリアス 1990、オーラー 2005、ル・ゴッフ 1988 などをも参照。
- 27) たとえば、ジャンケレヴィッチの「第三人称、第二人称、第一人称態の死」(ジャンケレヴィッチ 1978, pp.24-36) の論を援用した日本の「死の人称性」をめぐる論議の問題点については、渡辺 2008, pp.173-175 参照。
- 28) 主に日本社会における死をめぐる問題を論じた最近の研究書として、たとえば澤井 2005 ; 江川／中村編 2002 ; 池上 2003 ; 2006 ; 中村編 2006 など参照。
- 29) たとえばロック 2004 ; 島薮 2008b など参照。
- 30) ムーディ 1977.
- 31) ムーディ 1977, pp.147-167 参照。
- 32) ムーディは次のようにいう。「本書に事実として報告されていることを、信じかねると思う人は多いだろう。(中略) わたしも、ほんの二、三年前なら、全く同じような反応を示したに違いない。(中略) 一方では本書を読んで、ほんと胸をなでおろす人も数多くいるはずだ。(中略) 本書がきっかけになって、もう少し気楽に、自分の体験を話すようになってほしいとわたしは思っている。」ムーディ 1977, pp.13-14.
- 33) ムーディ 1977, pp.7-8. その他の死後世界訪問譚については、細田／渡辺編 2006 ; 北沢 2006 など参照。
- 34) ムーディ 1977, pp.147-167.
- 35) ムーディ 1989, pp.63-72 参照。さらにムーディ 1990 も参照。その後ムーディは、死者を呼び出して遺族と会わせることに尽力した。ムーディ／ペリー 1994 参照。ベッカーは、自殺未遂者の臨死体験の内容が自殺防止に役立つとしている。ベッカー 1992, pp.214-216 参照。なお自殺防止の研究は死生学にとっただけでなく、現代日本の緊急課題である。高橋 2006 参照。
- 36) 「NHK スペシャル立花隆レポート、臨死体験」NHK、1991 年放映 ; 立花 1992 ; 1994 ; 1996 も参照。
- 37) ベッカー 1992 参照。さらに野堀／ベッカー 1992 も参照。
- 38) たとえばベッカー 2009, pp.205-207. さらにセイボム 1896 ; 2006 など参照。
- 39) この問題についても立花隆がメディアで活躍した。立花 1988 ; 1992 など参照。臓器移植に関する出版物としては、臓器移植に批判的、懐疑的な立場からのものが多い。渡部／阿部 1994 ; 篠原 2001 ; 小松 2004 などを参照。臓器移植とその背景にある「現代の神話」については渡辺 2003 参照。

- 40) 梅原 1992 参照。
- 41) 低体温療法については NHK 林ほか 1997 参照。
- 42) 植物状態の回復については、たとえば宮城 1996；信貴 2001 など参照。
- 43) ロック 2004。
- 44) 免疫学者の多田富雄は「免疫系」が作り出す「自己」を論じた。多田 1993。また多田が 1991 年に創作した、臓器移植をテーマとした新作『無明の井』が上演された。この作品からは臓器移植に対する批判的立場が伺える。
- 45) たとえば森岡 2001、pp.1-95 参照。
- 46) 坪井 2007；近藤 2003；清水 2003 などを参照。
- 47) 山中／中内 2008 参照。
- 48) 島蘭 2007；島蘭／永見 監修 2007；島蘭 2008b；森岡 2001；林 2002；保阪 1993；アンドルーズ／ネルキン 2002；石原 1998；大林 1999；2005；加藤／飯田編 1988；山下 2006 など参照。
- 49) 島蘭進 2008a 参照。
- 50) 死の臨床研究会編 1990；日本死の臨床研究会編 2003 参照。
- 51) 柏木 2006：1997 参照。日本のホスピスについてはさらに山崎 1990；1993；山崎／米沢 2006 も参照。
- 52) デーケン 2001；1995；1991；生と死を考える会編 2002 など参照。
- 53) 日野原 2000、p.8。R. フルトンについてはベッカー 2008、p.75 参照。
- 54) 日野原／山本編 1988。
- 55) この出版に続いてさらに同編者による第 2 集、第 3 集が出版された。それらは聖路加看護大学での講義がもとになったものであり、次のような構成をもつ。第 2 集：1「喪失体験—生別と死別—」（山本俊一）、2「生と死」（杉浦昌也）、3「臨死患者の思いを聴く」（井原泰男）、4「死をめぐる法理と倫理」（唄孝一）、5「病名告知の論理と倫理」（吉利和）、6「ターミナルケアにおける Quality of Life」（村上國男）、7「死に対する精神反応の分析」（山本俊一）、8「死の臨床—看護に進む学生に」（日野原重明）。第 3 集：1「死の類型論—三つの杯」（山本俊一）、2「死生学における文学的アプローチ」（山本俊一）、3「孤独からの解放—臨床牧会における臨死患者への心の援助について」（木村知巳）、4「悲嘆教育 Grief Education」（アルフォンス・デーケン）、5「小児の死とそのケア」（西村昂三）、6「ターミナルケア—内科医の立場から」（岡安大仁）、7「終末期医療」（大井玄）、8「免疫モデルと死生モデル」（山本俊一）、9「死の教育—デスエデュケーション」（日野原重明）。
- 56) 田代 1999；2005；田宮 2007；神居ほか 1991；ビハラー活動実践研究会編 1993 など参照。
- 57) 有馬ほか 1992。
- 58) 竹田純郎／森秀樹編 1997。

- 59) 神奈川大学評論編集専門委員会編 1998。
- 60) 細見博志編 2004。さらに細川ほか 1991；懷徳堂記念会編 2001 など参照。
- 61) ベッカー 2008。
- 62) ベッカー 2008, p.90。
- 63) Balk (ed.) 2007, p.v。
- 64) 多氣田／原 2000。
- 65) 栗林／森下 2000。
- 66) 朝日新聞社編 2001 の既刊一覧 (p.176) 参照。
- 67) 死生学研究編集委員会編 2003-。
- 68) 島蘭／竹内／小佐野編 2008。
- 69) 2008 年には『死生学研究』が2回出されている。そして2007 年以降、死生学講座(人文社会系研究科次世代人文学開発センター上廣死生学講座) も設置された。
- 70) 各巻の冒頭に付された「刊行にあたって」(p.iii) から引用。
- 71) 島蘭／竹内編 2008。
- 72) 熊野／下田編 2008。
- 73) 武川／西平編 2008。
- 74) 小佐野／木下編 2008。
- 75) 高橋／一ノ瀬編 2008。
- 76) ト部は次のようにいう。「生と死は表裏一体。死だけが問題なのではありません。苦悩、不安を取り上げるなら、生と死、その両面の苦悩と不安を取り上げなければ、人間を全体性においてとらえることはできないのです。」ト部 1991, p.214。
- 77) 東洋英和女学院大学死生学研究所編 2005；2006；2007；2008。
- 78) 青木 1996。
- 79) そのほか第 32 回モントリオール世界映画祭グランプリ受賞、第 32 回日本アカデミー賞最多全 13 部門優秀賞受賞。
- 80) なおベッカーは以前から、欧米人は日本人の「死の叡智」から学ぶべきことが多いと指摘していた。ベッカー 2009。
- 81) 梶田 2003。
- 82) パラダイム・シフトについてはクーン 1971 参照。

## 参考文献

- 青木新門 1996：『納棺夫日記』（増補改訂版）文藝春秋（旧版：桂書房 1993）。
- 朝日新聞社編 2000：『アエラムック 死生学がわかる。』朝日新聞社。
- 2001：『アエラムック 日本神話がわかる。』朝日新聞社。

- アリエス、フィリップ 1990:『死を前にした人間』(成瀬駒男訳) みすず書房 (原著: Philippe Ariès, *L'homme devant la mort*, 1977)。
- 有馬朗人ほか 1992:『東京大学公開講座 55 生と死』東京大学出版会。
- アンドルーズ、L. / ネルキン、D. 2002:『人体市場—商品化される臓器・細胞・DNA—』(野田亮/野田洋子訳) 岩波書店 (原著: Lori Andrews/Dorothy Nelkin, *Body Bazar*, 2001)。
- 五十嵐薫 2007:『マザー・テレサの真実—なぜ、「神の愛宣教会会」をつくったのか』P H P 研究所。
- 池上良正 2003:『死者の救済史—供養と憑依の宗教学』角川書店。
- 2006:『死者の『祭祀』と『供養』をめぐる』東洋英和女学院大学死生学研究  
所編 2006, pp.99-120。
- 池田清彦 2006:『脳死臓器移植は正しいか』角川書店。
- 石原理 1998:『生殖革命』筑摩書房。
- イリッチ、イヴァン 1979:『脱病院化社会—医療の限界』(金子嗣郎訳) 晶文社 (原著: Ivan Illich, *Limits to Medicine. Medical Nemesis: The Expropriation of Health*, 1976)。
- 梅原伸太郎 1995:『「他界」論—死生観の比較宗教学』春秋社。
- 梅原猛編 1992:『脳死は、死でない。』思文閣出版。
- ト部文磨 1991:『キューブラ・ロス 生と死の癒し』アニマ 2001。
- 永六輔 1994:『大往生』岩波書店。
- 永六輔 2002:『妻の大往生』中央公論新社 (文庫版 2005)。
- 江川温/中村生雄編 2002:『死の文化誌—心性・習俗・社会』昭和堂。
- 江口重幸/斎藤清二/野村直樹編 2006:『ナラティヴと医療』金剛出版。
- NHK 林勝彦&「人体」プロジェクト 1997:『これが低体温療法だ—脳死を防ぐ新医療』  
日本放送出版協会。
- エリアス、ノベルト 1990:『死にゆく者の孤独』(中居実訳) 法政大学出版局 (原著: Norbert Elias, *Über die Einsamkeit der Sterbenden*, 1982; *Alten und Sterben*, 1985)。
- 大下大圓 2005:『癒し癒されるスピリチュアルケア—医療・福祉・教育に生かす仏教の心』医学書院。
- オオバヤシ、ヒロシ編 1995:『死と来世の系譜』(安藤泰至訳) 時事通信社 (原著: Hiroshi Obayashi (ed.), *Death and Afterlife: Perspectives of World Religions*, 1992)。
- 大林雅之 1999:『バイオエシックス教育のために』メディカ出版。
- 2005:『生命の淵—バイオエシックスの歴史・哲学・課題』東信堂。
- 尾崎真奈美/奥健夫編 2007:『スピリチュアリティとは何か—哲学・心理学・宗教学・  
舞踊学・医学・物理学それぞれの視点から』ナカニシヤ出版。
- 小佐野重利/木下直之編 2008:『死生学 4 死と死後をめぐるイメージと文化』東京大  
学出版会。

- オーラー、ノベルト 2005：『中世の死―生と死の境界から死後の世界まで』（一條麻美子訳）法政大学出版局（原著：Norbert Ohler, *Sterben und Tod im Mittelalter*, 1990）。
- 懷徳堂記念会編 2001：『生と死の文化史』和泉書院。
- 梶田昭 2003：『医学の歴史』講談社。
- 柏木哲夫 1996：『死にゆく患者の心に聴く―末期医療と人間理解』中山書店。
- 1997：『死を看取る医学―ホスピスの現場から』日本放送出版協会。
- 2006：『定本 ホスピス・緩和ケア』青海社。
- 2008：『いのちに寄り添う。―ホスピス・緩和ケアの実際』KK ベストセラーズ。
- 加藤咄堂 2006：『死生観―史的諸相と武士道の立場』書肆心水（初版明治 37 年、増補 19 版明治 43 年、井冽堂）。
- 加藤尚武／飯田亘之編 1988：『バイオエシックスの基礎―欧米の「生命倫理」論』東海大学出版会。
- 神奈川大学評論編集専門委員会編 1998：『死のコスモロジー』御茶の水書房。
- 神居文彰／田宮仁／長谷川匡俊／藤腹明子 1993：『臨終行儀―日本的ターミナル・ケアの原点』北辰堂。
- 河野友信／平山正実編 2000：『臨床死生学事典』日本評論社。
- 岸本英夫 1964：『死を見つめる心―ガンとたたかった十年間』講談社。
- 北沢裕 2006：「西欧中世の死後世界旅行記における文化的複合性」細田／渡辺編 2006, pp.359-386.
- キューブラー＝ロス、エリザベス 1971：『死ぬ瞬間―死にゆく人々との対話』（川口正吉訳）読売新聞社（完全新訳改訂版は 2001a）。
- 1975：『死ぬ瞬間の対話』（川口正吉訳）読売新聞社（原著：Elisabeth Kübler-Ross, *Questions and Answers on Death and Dying*, 1974）。
- 1977：『続 死ぬ瞬間』（川口正吉訳）読売新聞社（完全新訳改訂版は 2001c）。
- 1982：『生命ある限り―生と死のドキュメント』（霜山徳爾／沼野元義訳）産業図書（原著：To Live Until We Say Good-bye, 1978）。
- 1985：『新 死ぬ瞬間』（秋山剛／早川東作訳）読売新聞社（新訳は 2007b）。
- 1991：『エイズ 死ぬ瞬間』（読売新聞社科学部訳）読売新聞社（原著：Aids: The Ultimate Challenge, 1987）。
- 1995a：『死後の真実』（伊藤ちぐさ訳）日本教文社（原著：On Life after Death, 1991）。
- 1995b：『天使のおともだち』（伊藤ちぐさ訳）日本教文社（原著：Remember the Secret, 1982）。
- 1997：『死ぬ瞬間と臨死体験』（鈴木晶訳）読売新聞社（改題は 2001b）。
- 1998a：『人生は廻る輪のように』（上野圭一訳）角川書店（原著：The Wheel of

- Life*, 1997)。
- 1998b:『タギーへの手紙—死と孤独、小児ガンに立ち向かった子どもへ』(アグネス・チャン訳) 佼成出版社(原著: *A Letter to a Child with Cancer*, 1979)。
  - 2001a:『死ぬ瞬間—死とその過程について』(鈴木晶訳) 中央公論新社(読売新聞社 1998)(原著: *On Death and Dying*, 1969)。
  - 2001b:『「死ぬ瞬間」と死後の生』(鈴木晶訳) 中央公論新社(原著: *Death is of Vital Importance*, 1995)。
  - 2001c:『死、それは成長の最終段階 続死ぬ瞬間』(鈴木晶訳) 中央公論新社(読売新聞社 1999; 原著: *Death: The Final Stage of Growth*, 1975)。
  - /ケスラー、デーヴィッド 2001:『ライフ・レッスン』(上野圭一訳) 角川書店(原著: Elisabeth Kübler-Ross/David Kessler, *Life Lessons*, 2000)。
  - / — 2007:『永遠の別れ—悲しみを癒す智慧の書』(上野圭一訳) 日本教文社(原著: *On Grief and Grieving: Finding the Meaning of Grief Through the Five Stages of Loss*, 2005)。
  - 2007:『子どもと死について』(鈴木晶訳) 中央公論新社(原著: *On Children and Death*, 1983)。
- 熊野純彦/下田正弘編 2008:『死生学 2 他界が照らす生』 東京大学出版会。
- 栗林玲子/森下育彦 2000 『「生」と「死」を考える映画ビデオガイド』 朝日新聞社編 2000, pp.148-152。
- グリーンハル、トリシャ/ハーウィッツ、ブライアン編 2001:『ナラティヴ・ベイス・メディスン—臨床における物語りと対話』(斎藤清二/山本和利/岸本寛史監訳) 金剛出版(原著: Trisha Greenhalgh/Brian Hurwitz (eds.), *Narrative Based Medicine: Dialogue and Discourse in Clinical Practice*, 1998)。
- グレイ、シャーロット 1991:『マザー・テレサ』(橘高弓枝訳) 偕成社(原著: Charlotte Gray, *Mother Teresa*, 1988)。
- クーン、トーマス 1971:『科学革命の構造』(中山茂訳) みすず書房(原著: Thomas S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, 1962)。
- ル・ゴッフ、ジャック 1988:『煉獄の誕生』(渡辺香根夫訳) 法政大学出版局(原著: Jacques Le Goff, *La naissance du Purgatoire*, 1981)。
- 小林光恵 2005:『死化粧 最期の看取り』 宝島社(文庫版: 2009)。
- 小松美彦 2004:『脳死・臓器移植の本当の話』 P H P 研究所。
- /土井健司 2005:『宗教と生命倫理』 ナカニシヤ出版。
- ゴラー、ジェフリー 1986:『死と悲しみの社会学』(宇都宮輝夫訳) ヨルダン社(原著: Geoffrey Gorer, *Death, Grief, and Meaning in Contemporary Britain*, 1965)。
- ゴルレ、ジョルジュ/バルビエ、ジャン 1985:『マザー・テレサ 愛の旅立ち』(支倉寿子訳) 日本教文社(原著: Georges Gorée/Jean Barbier, *Amour sans frontière*:

- Mère Teresa de Calcutta, 1977)。
- ゴンザレス・バラド、ホセ・ルイス編 1997:『マザー・テレサ 愛と祈りのことば』(渡辺和子訳) P H P 研究所 (原著: José Luis González-Balado, *Mother Teresa; In My Own Words*, 1996)。
- 近藤卓編 2003:『いのちの教育』実業之日本社。
- 近藤功行／小松和彦編 2008:『死の儀法—在宅死にみる葬の礼節・死生観』ミネルヴァ書房。
- 坂井かをり 2007:『がん緩和ケア最前線』岩波書店。
- サドナウ、デヴィッド 1992:『病院でつくられる死—「死」と「死につつあること」の社会学』(岩田啓靖／志村哲郎／山田富秋訳) せりか書房 (原著: David Sudnow, *Passing on: The Social Organization of Dying*, 1967)。
- 澤井敦 2005:『死と死別の社会学—社会理論からの接近』青弓社。
- 信貴芳則 2001:『植物状態からの生還』調栄社。
- 自死遺児編集委員会・あしなが育英会編 2005:『自殺って言えなかった。』サンマーク出版。
- 死生学研究編集委員会編 2003:『死生学研究』東京大学大学院人文社会系研究科。
- 「死生学研究」編集委員会編 2008:『死生学研究』第 10 号、東京大学大学院人文社会系研究科。
- 篠原隆治 2001:『脳死・臓器移植、何が問題か—「死ぬ権利と生命の価値」論を軸に』現代書館。
- 死の臨床研究会編 1990:『死の臨床』I—III、論風社。
- 島蘭進 2003:「死生学試論 (一)」東京大学大学院人文社会学系研究科編『死生学研究』2003 年春号、pp.12-35。
- 2006:「解説 死生学研究と死生観—加藤咄堂と死生観の論述」加藤咄堂 2006, pp.243-284 (初出: 島蘭進「死生学試論 (二)—加藤咄堂と死生観の論述」東京大学大学院人文社会学系研究科編『死生学研究』2003 年秋号、pp.8-34.)
- 2007:「人の胚の研究に慎重でなければならない理由—人間の尊厳の異なる考え方—」東洋英和女学院大学死生学研究所編 2007, pp.103-128。
- ／永見勇監修 2007:『スピリチュアリティといのちの未来—危機の時代における科学と宗教』人文書院。
- ／竹内整一／小佐野重利編 2008:『死生学』全 5 巻、東京大学出版会。
- ／竹内整一編 2008:『死生学 1 死生学とは何か』東京大学出版会。
- 2008a:「死生学とは何か—日本での形成過程を顧みて」島蘭／竹内編 2008, pp.9-30。
- 2008b:「いのちの選別はなぜ避けるべきなのか?—出生前診断をめぐる日本の経験から」『死生学研究』編集委員会編 2008, pp.32-60。

- 清水恵美子 2003：『いのちの教育—高校生が学んだデス・エデュケーション』法蔵館。
- 清水哲郎 2000：『医療現場に臨む哲学Ⅱ ことばに与る私たち』勁草書房。
- ジャンケレヴィッチ、ヴラジミール 1978：『死』（仲沢紀雄訳）みすず書房（原著：Vladimir Jankélévitch, *La mort*, Paris 1966）。
- 女子パウロ会編 2003：『マザー・テレサ 日本人へのメッセージ』（三保元訳）女子パウロ会。
- 新村拓 1991：『老いと看取りの社会史』法政大学出版局。
- 生と死を考える会編 2002：『生と死の意味を求めて』一橋出版。
- セイボム、マイクル・B. 1986：『「あの世」からの帰還—臨死体験の医学的研究』日本教文社（原著：Michael B. Sabom, *Recollections of Death*, 1982）。
- 2006：『続「あの世」からの帰還—新たなる真実・47名の臨死体験』日本教文社（原著：Michael B. Sabom, *Light and Death*, 1988）。
- ソンドース、シシリーほか編 2006：『ホスピス その理念と運動』（岡村昭彦監訳）雲母書房（『ホスピスケア ハンドブック』（岡村昭彦監訳）家の光協会 1984 の復刊。原著：Dame Cicely Saunders, Dorothy H. Summers and Neville Teller, *Hospice: the living idea*, 1981）。
- ソンドース、シシリー 2006：「ホスピス設立の理念」ソンドースほか編 2006, pp. 22-24.
- 高橋都／ノ瀬正樹編 2008：『死生学 5 医と法をめぐる生死の境界』東京大学出版会。
- 高橋祥友 2003：『中高年自殺—その実態と予防のために』筑摩書房。
- 2006：『自殺予防』岩波書店。
- 田口ランディ 2008：「エリザベス・キューブラー・ロス」島薮／竹内編 2008, pp. 187-209.
- 武川正吾／西平直編 2008：『死生学 3 ライフサイクルと死』東京大学出版会。
- 竹田純郎／森秀樹編 1997：『＜死生学＞入門』ナカニシヤ出版。
- 多氣田亜希子／原晶子 2000：『「生」と「死」を考えるブックガイド五十冊』朝日新聞社編 2000, pp.153-161.
- 田代俊孝 1999：『仏教とビハラー運動—死生学入門』法蔵館。
- 2005：『ビハラー往生のすすめ—悲しみからのメッセージ』法蔵館。
- 多田富雄 1993：『免疫の意味論』青土社。
- 立花隆 1988：『脳死再論』中央公論社。
- 1992：『脳死臨調批判』中央公論社（中公文庫 1994）。
- 1994：『臨死体験』上下、文藝春秋（初出：『文藝春秋』1991年8月号～1992年9月号）。
- 1996：『証言・臨死体験』文藝春秋（初出：『クレア』文藝春秋 1995年2月号～1996年7月号、文庫版 2001年）。



- 谷山洋三／伊藤高章／窪寺俊之 2004：『スピリチュアルケアを語る－ホスピス、ビハラの臨床から』関西学院大学出版会。
- 田宮仁 2007：『「ビハラ」の提唱と展開』学文社。
- 田村芳朗ほか著 1989：『新しい生命倫理を求めて』北樹出版。
- 坪井龍太 2007：「生命の教育に取り組んだ教師たち－教職の理解を深めるために－」東洋英和女学院大学死生学研究所編 2007、pp.89-102。
- デイヴィス、D. J. 2007：『死の文化史』（森泉弘次訳）教文館（原著：Douglas Davies, *A Brief History of Death*, 2005）。
- デーケン、アルフォンス／飯塚眞之編 1991：『日本のホスピスと終末期医療』春秋社。
- 1995：『キリスト教と私』聖母の騎士社。
- 2001：『生と死の教育』岩波書店。
- 東洋英和女学院大学死生学研究所編 2005：『死生学年報 2005 親しい者の死』リトン。
- 2006：『死生学年報 2006 死の受容と悲嘆』リトン。
- 2007：『死生学年報 2007 生と死の表現』リトン。
- 2008：『死生学年報 2008 <スピリチュアル>をめぐって』リトン。
- ドゥブレイ、シャーリー 1989：『ホスピス運動の創始者 シシリー・ソンダース』（若林一美ほか訳）日本看護協会出版会（原著：Shirley du Boulay, *Cicely Saunders: The Founder of the Modern Hospice Movement*, 1984）。
- 中村生雄編 2006：『思想の身体 死の巻』春秋社。
- 日本死の臨床研究会 2003：『死の臨床』全 10 巻（新装・新訂版）、人間と歴史社。
- 野堀拓路／ベッカー、カール 1992：『ある少年の臨死体験』読売新聞社。
- 林真理 2002：『操作される生命－科学的言説の政治学』NTT 出版。
- バーリー、ナイジェル 1998：『死のコスモロジー』（柴田裕之訳）凱風社（原著：Nigel Barley, *Dancing on the Grave: Encounters with Death*, 1995）。
- バンクロフト、アン 1984：『20 世紀の神秘思想家たち－アイデンティティの探求』（吉福伸逸訳）平河出版社（原著：Anne Bancroft, *Twentieth Century Mystics and Sages*, 1976）。
- 日野原重明 1983：『死をどう生きたか』中央公論社。
- ／山本俊一編 1988：『死生学・Thanatology 死から生の意味を考える』技術出版。
- ／——編 1989：『死生学・Thanatology 第 2 集 生の終焉を如何に迎えるか』技術出版。
- ／——編 1990：『死生学・Thanatology 第 3 集 他者の死から自己の死を観る』技術出版。
- 1995：『生と死のケア』医学書院。
- 2000：「よく生きることは、よく死ぬこと－死生学への誘い」朝日新聞社編 2000、pp.4-8。

- 編 2002：『死をみつめ、今を大切に生きる』春秋社。
- ビハール実践活動研究会編 1993：『「ビハール活動」―仏教と医療と福祉のチームワーク』本願寺出版社。
- ベッカー、カール 1992：『死の体験―臨死現象の探求』法蔵館。
- 編 2000：『生と死のケアを考える』法蔵館。
- 2000a：「序章 ポルノ化した＜死＞」ベッカー編 2000, pp.1-14.
- 2000b：「日本的なターミナルケアを目指して―患者の生と死の質をどう評価するか」ベッカー編 2000, pp.272-316.
- 2008：「アメリカの死生観教育―その歴史と意義―」島蘭／竹内編 2008, pp.75-103.
- 編 2009：『愛する者の死とどう向き合うか―悲嘆の癒し』（山本佳世子訳）晃洋書房。
- 2009：「おわりに代えて―欧米が日本から学び取った死の叡智」ベッカー編 2009, pp.201-208.
- 保阪正康 1993：『安楽死と尊厳死―医療の中の生と死』講談社。
- 細川亮一ほか 1991：『死』（現代哲学の冒険 1）岩波書店。
- 細田あや子／渡辺和子編 2006：『異界の交錯』上下巻、リトン。
- 細見博志編 2004：『生と死を考える―「死生学入門」金沢大学講義集』北國新聞社。
- マザー・テレサ 1982：『生命あるすべてのものに』講談社。
- マタイス、アンセルモ 1997：『イエスを愛した女マザー・テレサー「聖女」の真実』現代書林。
- 松村一男編 2004：『生と死の神話』リトン。
- 宮城和男 1996：『がんばんれ朋之！ 18 歳―植物状態からの生還 [265 日の記録]』あけび書房。
- ムーディ Jr., レイモンド・A. 1977：『かいまみた死後の世界』（中山善之訳）評論社（新装版 1989；原著：Raymond A. Moody, Jr., *Life after Life*, 1976）。
- 1989：『続・かいまみた死後の世界』（駒谷昭子訳）評論社（原著：Reflections on *Life after Life*, 1977）。
- 1990：『光の彼方に―死後の世界を垣間みた人々』（笠原敏雄／河口慶子訳）TBS ブリタニカ（原著：The *Light Beyond*, 1988）。
- ／ペリー、ポール 1994：『リユニオンズ―死者との再会』（宮内もと子訳）同朋舎出版（原著：Raymond A. Moody/Paul Perry, *Reunions: Visionary Encounters with Departed Loved Ones*, 1993）。
- 明治大学人文科学研究所編 2006：『明治大学公開文化講座 XXV 「生と死」の東西文化論』風間書房。
- モース、メルヴィン／ペリー、ポール 1997：『臨死体験 光の世界へ』（立花隆監修、TBS ブリタニカ編集部訳）TBS ブリタニカ（原著：Melvin Morse with Paul Perry,

- Closer to the Light*, 1990)。
- モラン、エドガール 1973：『人間と死』（古田幸男訳）法政大学出版局（原著：Edgar Morin, *L'homme et la mort*, 1970）。
- 森岡正博 1994：『生命観を問いなおす—エコロジーから脳死まで』筑摩書房。
- 1988：『生命学への招待—バイオエシックスを超えて』勁草書房。
- 2001：『生命学に何ができるか—脳死・フェミニズム・優生思想』勁草書房。
- 山折哲雄 1990：『死の民俗学—日本人の死生観と葬送儀礼』岩波書店（岩波現代文庫版：2002）。
- 山崎章郎 1990：『病院で死ぬということ』主婦の友社（文庫版：文藝春秋 1996）。
- 1993：『続・病院で死ぬということ—そして今、僕はホスピスに』主婦の友社。
- ／米沢慧 2006：『新ホスピス宣言—スピリチュアルケアをめぐる』主婦の友社。
- 山下邦也 2006：『オランダの安楽死』成文堂。
- やまだようこ 2007：『やまだようこ著作集第8巻 喪失の語り—生成のライフストーリー』新曜社。
- 山中伸弥／中内啓光編 2008：『再生医療へ進む最先端の幹細胞研究—注目の iPS・ES・間葉系幹細胞などの分化・誘導の基礎と、各種疾患への臨床応用』（『実験医学』増巻）羊土社。
- 湯浅泰雄編 2003：『スピリチュアリティの現在—宗教・倫理・心理の視点』人文書院。
- 米沢慧 2006：『病院化社会をいきる—医療の位相学』雲母書房。
- ロック、マーガレット 2004：『脳死と臓器移植の医療人類学』（坂川雅子訳）みすず書房（原著：Margaret Lock, *Twice Dead: Organ Transplants and the Reinvention of Death*, 2001）。
- 脇本平也 1997：『死の比較宗教学』岩波書店。
- 和光大学総合文化研究所 永澤峻編 2007：『死と来世の神話学』言叢社。
- 渡辺和子 2003：『臓器移植と現代の神話』国際宗教研究所編『現代宗教 2003』東京堂出版 pp.168-182。
- 2008：『メソポタミアの『慰霊』と『治療』—死霊による災厄と『死の人称性』—』東洋英和女学院大学死生学研究所編 2008, pp.155-185。
- 渡部良夫／阿部知子編 1994：『「脳死」からの臓器移植はなぜ問題か—臓器移植法案に反対する医師達からのメッセージ』ゆるみ出版。
- Balk, David (ed.) 2007: *Handbook of Thanatology: The Essential Body of Knowledge for the Study of Death, Dying, and Bereavement*, New York.
- DeSpelder, Lynne Ann/ Strickland, Albert Lee 1992: *The Last Dance: Encountering Death and Dying*, 3rd. ed. (1st ed.: 1987), Mountain View, California.
- Doka, Kenneth J./ Morgan, John D. 1993: *Death and Spirituality*, Amityville, New York.
- Morgan, John D. (ed.) 1997: *Readings in Thanatology*, Amityville, New York.

# Perspectives of Thanatology as a Comprehensive Study

by Kazuko Watanabe

Toyo Eiwa University opened in 1989 and celebrates its 20<sup>th</sup> anniversary in 2009. Taking advantage of the characteristics of the university with professorates from various fields of Human and Social Sciences for “interdisciplinary” researches and education, The Institute of Thanatology was founded in 2003. It has been undertaking research activities as well as open courses since 2004, and has been publishing research reports in the *Annual of the Institute of Thanatology*.

In the 1960's, Thanatology (Death Studies) was established as an academic field in the West to resolve the contradictions brought about by modern Medicine, which had increasing control over death and dying in hospitals. For Thanatology, we need all-round knowledge about human beings as well as their background (i.e. their culture, religion, history, society, education, and so forth). We also need all kinds of science: basic, human, social, natural, and clinical. To make these disciplines interact, Thanatology should not take the conventional interdisciplinary approach but rather, a new comprehensive one. Researchers of Thanatology need to be specialists but, at the same time open to other fields, ready to engage in dialogues with those in other disciplines.

In Japan, Thanatology, translated, “Shisei-gaku (Death and Life Studies)” was established during the 1980's. Consequently, as it is able to include the whole gamut of Human Studies, it is a more comprehensive discipline than in other countries. It will continue growing through innumerable encounters with other disciplines and paradigm shifts occurring within it. Our Institute would like to further contribute to Thanatology by specific and concrete researches and a diversity of open courses.